

にいがた

地域映像アライヴ

蘇る——にいがたの生活——家族と身体からだの記憶





ご挨拶

このたび、関係各位のご協力を得て、「地域映像アーカイブ」のイベントを開催することになりました。まずはご協力を惜しまれなかった関係各位にあつく御礼申し上げます。

わたくしたち新潟大学人文学部では、教育と研究という二つの大きな使命を掲げていますが、その成果をどうすれば地域のみなさんに還元することができるだろうか、と常々考えてまいりました。それと同時に、この二つの活動を地域のみなさんと一緒に、地域のみなさんのお力を借りながらできないだろうか、とも考えてみました。今回のイベントはそうした考えをもとに企画されたものです。

今回、第一部で上映・展示するのは、県下南魚沼市（旧六日町）の先人たちが撮影した写真と映画をデジタル化したものです。写真のなかには明治初年のものも含まれており、貴重な記録ばかりです。これらは、いわば何よりも雄弁な「地域の履歴書」です。おそらく新潟県内には、これ以外にも数多くの写真が、人の眼に触れることなく眠っているものと思われます。今後、このような貴重な記録を調査し、保存と公開に向けた取り組みが必要です。第二部では、そのために必要な準備作業や、すでに始まった取り組みなどについて第一線で活躍されている先生方にお話していただきます。

各家庭に保存されている古い写真、誰もかえりみなくなってしまった色あせた写真、じつはそういった写真などが「地域の履歴書」そのものなのです。私たちは、一枚でも多くの写真ならびに映画を探し出し、それを大切に保存し、かつ多くの方々に見ていただきたいと考えています。そのためには、私たちの活動を知っていただかなければなりません。今回のイベントはいわばその第一歩であります。これを契機に新潟県の「地域の履歴書」作りが活発になることを願っています。

みなさんには、どうかご理解とご支援を賜りますよう、お願いいたします。

新潟大学人文学部長 關尾史郎



にいがた地域映像文化遺産 展覧・上映イベント

地域映像の力—新潟からの情報発信とアーカイブ構築をめざして

蘇る—にいがたの生活—家族と身体(からだ)の記憶

日時：2009年2月7日(土曜日) 13:30—16:50 開場 13:00

会場内ロビーでは、スライドなどによる映像展覧をおこないます

場所：新潟県民会館 小ホール

新潟の地には、押入れや蔵の中に大切にしまわれている古い資料、とりわけ写真やフィルムが多く生き残っています。新潟大学は、このような地域の映像文化遺産の調査・発掘、保全・保管と閲覧を目的とした仕組みやルールづくりの拠点、すなわち「地域映像アーカイブ」の拠点を目指しています。

このたび、新潟の皆様にごうした地域の映像文化遺産の価値を知っていただき、ご協力を呼びかけることを目的として、地域映像文化遺産から見えてくるかつての地域生活と文化の魅力、「地域映像アーカイブ」の構築に向けた専門家や地域の写真館による様々な取組みをご紹介します。また、新潟大学が調査を行い、今回特別に公開を許された秘蔵の地域映像を展覧・上映いたします。

13:30 開会のご挨拶 關尾 史郎(新潟大学人文学部長)

13:40 第一部「甦る! 六日町の映像文化遺産」(司会:石田 美紀・新潟大学)

- ・金子 隆一(東京都写真美術館)「明治初年の湿板—今成無事平・新吾の写真」
- ・石井 仁志(写真研究家)「明治末から大正期の千枚のガラス乾板—高橋捨松の世界」
- ・平賀 壮太(前・熊本大学教授)「父・平賀洗一のこと」
- ・映画上映:平賀 洗一
 - 1.『1936年豪雪の六日町』(1936)
 - 2.『海女 へぐらじま』(1937)

15:10 第二部「地域映像アーカイブ構築のためにすべきこと」(司会:原田 健一・新潟大学)

- ・北村 順生(新潟大学)「地域映像アーカイブに向けて」
- ・吉原 悠博(吉原写真館六代目)「写真よる地域史の試み—写真アーカイブの試み」
- ・岡田 一男(下中E Cアーカイヴズ)「アーカイブスに散在する地域映像」
- ・とちぎあきら(東京国立近代美術館フィルムセンター)「フィルムセンターにおける役割」

17:00 閉会

高橋捨松・写





高橋 捨松・写

「地域映像アーカイブ」プロジェクトの目的と射程

新潟大学人文学部 准教授 北村 順生

1. はじめに

このたびの展覧・上映イベント「地域映像の力―新潟からの情報発信とアーカイブ構築をめざして」は、新潟大学人文学部と新潟大学人文社会・教育科学系研究プロジェクト「地域文化に関するコミユナルな映像アーカイブ情報の構築と情報発信」のもとに開催される。このイベントでは、「地域映像アーカイブ」プロジェクトの成果の一端を紹介するとともに、この活動に対する多くの方々の理解と協力を求めることを目的としている。ここで、我々の進めているプロジェクトの目的やその射程について簡単に紹介したい。

2. プロジェクトの背景と問題意識

まず、「地域映像アーカイブ」プロジェクトの背景として、大きく三つの問題意識からスタートしている。

第一に、現在流通している映像情報の地域的な偏在の問題だ。現代の日常生活の中で、われわれはテレビや映画をはじめとして大量の映像と接しながら生活している。しかしながら、テレビ局の系列関係や映像制作集団の大都市への偏りなど、中央一極集中型の社会構造の中では、情報の制作や発信、流通における中央と地方との間の格差は非常に大きい。こうした状況の中では、目にする映像の多くは、必然的に東京を頂点とした大都市についての映像が多くなる。たとえば、地域の社会や文化が映像の対象として取り上げられることがあっても、それは大都市の視点から描かれた紋切り型の地域の姿であり、地域で暮らす人々が感じている地域の自己像との間で齟齬をきたす場合も多い。地域の視点から作られた地域に関する映像が、地域自身の手で発信されるような場面は非常に限られているといえる。その結果、地域社会の姿として忘れ去れてしまっているものも多いのである。

第二の問題は、地域の映像に関する交流回路の欠如だ。近年のビデオカメラなどの撮影機器の急速な普及により、地域における日常生活の一端を映像情報として撮影、記録する機会は飛躍的に増えている。しかし、こうして生み出された映像コンテンツは、家族やせいぜいが身近な

友人の間で消費することを前提に作られたものが多い。地域における映像表現の一部として、社会的に共有していくような情報回路を欠いているため、地域文化の情報発信へと結びつかずにいる。そのため、撮影する側もそのような社会性を帯びた表現活動に向けての意識はきわめて薄い。しかし、もともとはごく個人的な意図で撮影、保存された映像が、異なる文脈の中では、地域や他者との結びつきの中で、記録と記憶を共有する手段として重要な価値をもってくる可能性はありうる。そのためにも、地域の映像を交流していく場の存在が必要となってくる。

第三に、公開される地域の映像情報の分断の問題だ。ブログやSNSの普及により、地域に関連した映像情報がさまざまな形態により公開されるケースも徐々に増えつつある。しかしそれらの映像コンテンツは、個々の映像が分断され断片化された状態で公開されており、たとえば新潟という地域文化に関する映像情報を俯瞰し、全体像を把握することが難しい状況にある。ある文脈で発信された別々の映像情報が、また別の文脈の中に置き換えられ並置された時に、新たな別の価値を生み出すことは多い。そのような映像と映像との間のつながりや関係性を生み出すためには、個々の断片的な映像情報を整理し、ネットワーク化していくような活動が必要となる。

3. プロジェクトの計画

以上のような問題意識のもとに、「地域映像アーカイブ」プロジェクトでは、にいがたという地域の中で大きく次の三つの分野において実践的な活動を行っていくことを計画している。

第一が、地域文化に関する映像アーカイブ情報を再構築していく活動である。その中には、既存の新潟の地域文化に関する映像資料について、調査、発掘、保全していくことが含まれる。しかしながら、地域文化に関わる映像資料に関する情報は大量かつ多様であり、とても一つの機関やプロジェクトとしてアーカイブの構築を完結できるものではない。そこで、地域の映像情報を収集しているさまざまな機関や個人と連携しながら、緩やかなネットワークをつくり、それらの映像資料の所蔵情報のデータベース化を進め、全体として新潟の地域文化に関する映像情報がアーカイブされ、活用されていくようにしたい。

第二に、現在はまだ資料化されていない地域文化に事象について、映像資料として記録し保存していく活動を行っていききたい。市町村の広域合併による地域文化の組織的支援の減少や、高齢化による戦前世代の減少など、地域の文化的資源を記録し保存していくことは危急の課題となっている。中央の視点から見た地域文化ではなく、地域の生活者の視線に基づいた地域文化のありようを映像化していく必要がある。その際にも、関連した活動を行っている団体や個人と連携し、協働することによって作業を進めていくことが求められる。

第三に、地域文化に関する映像交流の場の構築である。既存の映像資料を調査、発掘するにせよ、現在の地域文化を撮影、記録するにせよ、その成果を単に保存、保全しているだけでは地域にとって十分とはいえない。発掘や記録の結果生まれた映像資料について、それぞれの資料の性格に応じてもっとも適した形で、地域住民や地域外の関係者へと公開し、交流していく仕組み作りが重要となる。制度的あるいは技術的な検討の上で、それぞれの映像情報が適切な形で社会に開かれ、それらの映像を通じて新たな地域文化の再生産が行われるような回路をデザインしていく。

以上のような三つの実践的活動を行うことにより、地域社会で共有された、公共財としてのコミユナルな地域文化に関する映像アーカイブのモデルを構築していくことをプロジェクトでは目的としている。

4. 地域と地域を結ぶアーカイブのネットワーク

これまで述べてきた「地域映像アーカイブ」プロジェクトは、にいがたという地域の中で映像アーカイブの構築と活用を探ることを目的としている。しかし、同じような地域の映像アーカイブは、当然、全国のさまざまな地域社会において構想されうるものであるし、海外の地域コミュニティにおいても検討されるべきものである。既に、その先行的な活動事例も報告されてきている。

将来的に、このような地域のアーカイブ同士が相互に連携し、ネットワークを組んでいくことの意義は大きい。地域の映像表現が決して一極集中的な視点に囚われることなく、地域の生き生きした表現を取り交わすことで、われわれの見る世界感は大きく変わってくるに違いない。

地域映像アーカイブが取り扱う多くの映像表現は、地域生活の中で人々が地域の文化を映像として記録し表現しようという営みであり、鶴見俊輔が地域の日常的な生活と芸術との接点に位置するものとして名付けた「限界

芸術」の範疇に入るものであろう。現在、広く流通している映像表現の多くは、地域を眼差す画一的な視点や様式に枠付けられてしまっている。こうした状況の中で、地域映像アーカイブの構築は、われわれが持つ地域への視線や表現のあり方をあらためて問い直し、新しい地域文化を創造していく糧となることであろう。





高橋 捨松・写

はじめに

2009年2月7日におこなわれる「地域映像の力—新潟からの情報発信とアーカイブ構築をめざして」の展覧・上映イベントでは、新潟県六日町を舞台に活躍した四人の映像の制作者たちを紹介することになった。明治初期に湿板写真を試みた今成無事平・新吾、明治末から大正期にかけて1,200枚もの乾板写真を撮った高橋捨松、そして昭和十年代に9.5mmで映画をつくった平賀洗一、ここではこの四人のパイオニアの人となりとその背景となる六日町の文化について粗描する。

これらの映像の先人たちが、六日町という極東の国日本の一地域で、写真、映画という欧米から移入された近代のメディアをどう受容し、創造したのか。それを読み解くにあたって4つの観点から考えてみたい。1つは地主文化であり、2つは江戸時代から続く文人仲間のネットワークであり、3つは川舟文化の存在であり、4つは反権力的な自主独立の気風である。

1. 新潟における地主のあり方

新潟は近世、東北地方南部から信州にかけての地域を背景に、さまざまな物や人、情報が行き交う場所であった。1868(明治元)年には、三府五港の一つとして位置づけられ、日本海側としては唯一外港として開かれていた。また、現在の県域は、江戸時代においては高田藩、長岡藩、新発田藩他8藩、ならびに天領・預地など入り組んだ地域であったが、1871年の廃藩置県によって新潟・柏崎両県に統合され、佐渡は相川県に入ることになり、さらに1876年にこの3つの地域は統合される。

農業が中心だったこの時代において、1877年に新潟県は全国の米の約5%を生産し全国一の生産高をほこるだけでなく、各種の農家の副業による産物も多く、1888年の人口は約166万人で総人口の4%を占め、日本で一番居住者の多い都道府県でもあった。

一方で、明治政府によって進められた1873年の地租改正、1881年以降の松方デフレ政策によって、1890年代以降新潟において地主制が確立する。新潟県は全国一地主が多く、江戸時代に力を蓄えていた地主名望家層は、

自らの立場を強固なものにし大きな力を社会に発揮することになる(図1)。

ところで、地主層は300~1000町歩の巨大地主、50~300町歩の大地主、10~50町歩の中地主、5~10町歩の小地主、3~5町歩の在村耕作地主に分類できる。巨大地主は銀行や鉄道会社の発起人になり、貴族院議員に選ばれるなど県の名士といえる存在だが、地域社会からは遊離している。しかし、300町歩以下の大地主は地域社会に密着するだけでなく、農会や地主会などを組織し県全体での横の広がりをもち、10町歩以下の小地主や在村耕作地主が村政の実務を担う形で、地域社会をローカルな視点から見ただけでなくグローバルな視点で見て、地域振興のためになんらかの事業を興しうる立場にあった(新潟県, 1988, 12~13頁)。

『新潟県大地主名簿』(農政, 1968)で六日町の地主として記載されているのは、腰越家、遠藤家、高橋家、今成家の四家である(図2)。今回紹介される映像は、この地主の高橋家と今成家のものである。

まず、今成家の19代目、無事平(1837~1881)であるが、今成家は江戸時代年寄役を務めるなど由緒ある家柄である。今成無事平は明治に入ってから戸長、学区衛生取締役、徴兵議員となり、村会議員、県会議員も務めている(図3)。なお、今成新吾は無事平の弟である(図4)。

図1、1924年地主数

府県	地主数
新潟	263 (40)
秋田	212 (22)
宮城	161 (22)
山形	122 (13)
青森	107 (14)
茨城	106 (4)
熊本	102 (7)
埼玉	81 (2)
福島	80 (4)
岩手	73 (4)

() は50町以上の地主
中山清『巨大地主経営の史的構造』より

図2、六日町の大地主(地価)

1929年当時の当主	1888年	1916年	1929年
腰越 ハツ	13,300	14,433	14,813
遠藤 利一	9,800	6,550	5,536
高橋 捨松	7,700	23,182	15,762
今成 隼一郎	5,500	5,925	5,175

『新潟県大地主名簿』より



図3、今成 無事平

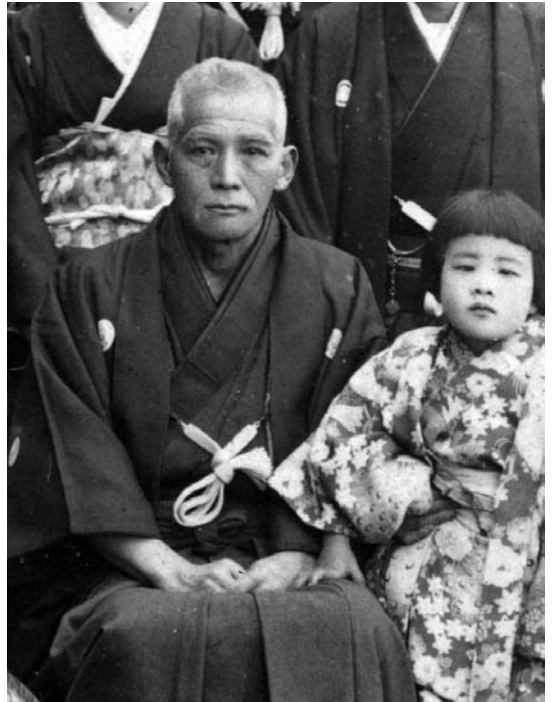


図5、高橋 捨松



図4、今成 新吾 (32歳) 1872年4月15日写

高橋捨松(1863~1930)は(図5)、高橋家の10代目であるが、地域経済の旗振り役として、船会社、酒造、金融業など幅広く事業を展開し活躍している(図6)。図2で見るとおり、高橋家は大正時代に入り家産を殖やしており、高橋捨松が地域経済の中で大きな役割を果たしていたことは見て取れる。

これに対して、平賀家はこうした大地主ではなかった

が、江戸時代末には中之島村柄沢(塩沢町)で漢方医を営んでおり、平賀洗一の父平賀臺作(1871~1930)は東京で医学を勉学の後、1899年六日町病院に迎えられ、後に医院を開業した。資産家であったことは間違いないが、平賀洗一(1902~1980)が生まれたころは必ずしも、医院の経営は順調ではなかったようだ(図7)。平賀洗一は東北帝国大学医学部を卒業後、北海道旭川竹村病院に勤務し蓄財した後、1931年11月に六日町に戻り、開業している。その後、六日町の地域文化人として町の行事やイベント(雪上運動会など)を企画する(図8)だけでなく、演劇、絵画、考古学などさまざまな分野で活躍する。

なお、この3家は仲町通りをはさんでご近所同士の関係であると同時に(図9)、互いに親戚関係でもある(図10)。

2. 豪雪と文人仲間

「凡雪九月末より降はじめて雪中に春を迎、正二の月は雪尚深し。三四の月に至りて次第に解、五月にいたりて雪全く消て夏道となる。(中略)されば雪中に在る事凡八ヶ月、一年の間雪を看ざる事僅に四ヶ月なれども、全く雪中に蟄るは半年也。」(鈴木, [1841] 1970) (図11)

六日町のある魚沼地方は豪雪地帯として知られ、一年のうち5~6ヶ月を雪の中で暮らす。越後縮や、草鞋、雪中道具などの藁細工などが冬期の副業として発達する

図6、高橋家酒蔵 高橋捨松・写



図8、『1936六日町の豪雪』より



図7、平賀洗一



図9、平賀壮太『お父さんの子供の頃の話』より合成

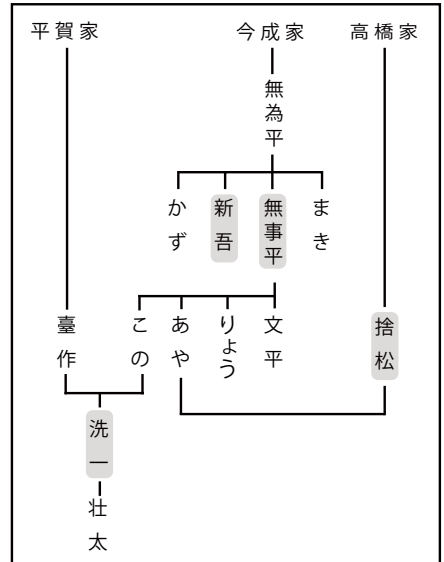


図10、今成家、高橋家、平賀家三家の関係系図

大雪の年は両側の家の屋根の雪も通りに
すてるために大通りせもん存になつてしまつた。

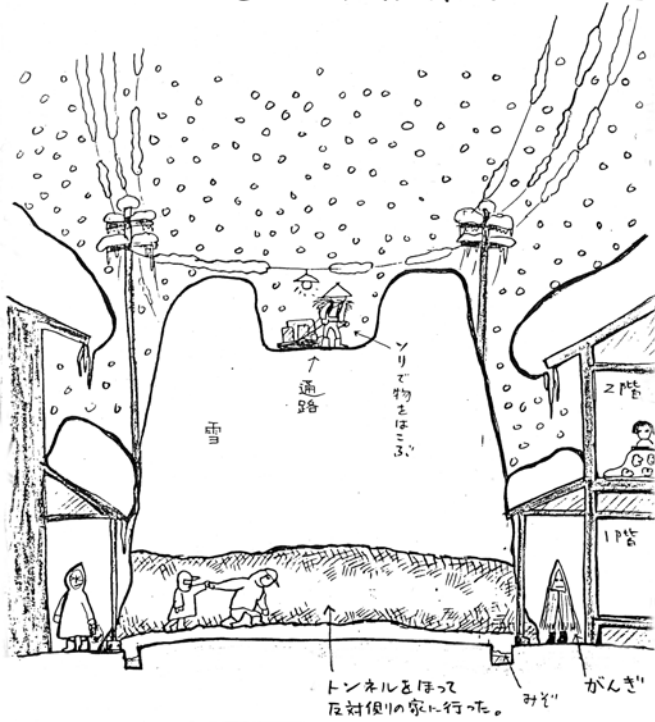


図 11、平賀壮太『お父さんの子供の頃の話』より

だけでなく、越後名物「女郎と三助に女工」と呼ばれるように、江戸時代から杜氏や湯屋の三助など冬期の出稼ぎで知られていた。当然であるが、出稼ぎという現象には、地主制の発達と共に多くの小作農の貧窮化という事態が反映している。

ところで、『北越雪譜』を書いた鈴木義三治こと俳号鈴木牧之は、六日町の隣町塩沢に生まれている。鈴木牧之の父恒右衛門は越後縮の仲買業を営みのに質屋も営んだ商人であった。牧之は姉（この）が今成家に嫁いだこともあり、今成家に商売の仕方を習いに行っている。また、恒右衛門は俳句をたしなみ俳号牧水とし、文人としての交友関係をもっていた。鈴木牧之も父に習い、俳句を読むだけでなく、さらに山東京伝や滝沢馬琴、十返舎一九など江戸や大阪の文人との幅広い交遊関係をもった。

今成無事平も詩文和歌発句を好み特に狂文狂句を得意としたが、平賀洗一の父平賀臺作も俳句を好み俳号蛇足堂と号し、『日本及日本人』、『ほととぎす』などに投稿し、夏目漱石、高浜虚子などと伍して入選している（南魚沼、1971、下798-799頁）。俳句はこうした地域の地主名望家層の冬の楽しみであり、同時に地域を越えてさまざまな人びととつながるネットワークのツールでもあった。

今成家に残されたさまざまな写真に関連する資料や書簡をみると、すでに江戸時代から培われた俳人仲間のネットワークを通して、新しい写真仲間のネットワークが形

成されていることが分かる。今成無事平はこの仲間を通して東京に遊学にでたおり、カメラや現像のための道具を購入するだけでなく、写真術の要諦につき講習を受けている。なお、免許皆伝が大鐘より1870年に授けられている（図12）。

ところで、今成無事平と新吾の写真を見ると、二人が股旅者になったり、侍になったり、さまざまな役を演じながらお互いに被写体になっている様子が分かる。雪に閉じ込められた世界での遊興のあり方が、写真からほのみえてくるようだ。高橋捨松も忙しい事業のかたわら、写真にうち興じたものと思われるが、写真に傾ける秘かな情熱を通して、そこに雪国の精神生活が感じられる。

金子隆一は、今成無事平・新吾、高橋捨松の写真を評して、写真館のようなまい写真ではなく、「へたな写真」だという。つまり、それは写真館のように技術的にうまくないだけでなく、パターン化された被写体の撮り方と違ったユニークな眼差しがあり、それが独特な雰囲気写真を写真に付加させていることを指している。これは、写真史でようやく現れた写真なのだ。そこには移入された洋物の写真の模倣ではない、日本の生活や社会に深く関わったところで出てくる奇妙で、何かリアルを伴った感覚がある。では、その感覚は、一体どこからくるのだろうか。

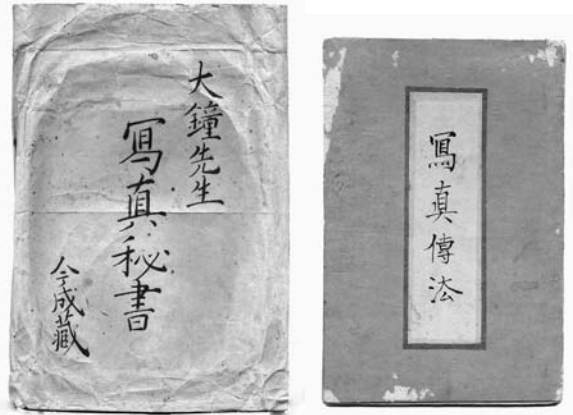


図 12、写真の現像関係の文書『写真秘書』1866（慶応2）年4月、ならびに『写真伝法』1870（明治3）年6月6日

3. 舟と異端の美学

江戸時代、六日町は江戸と新潟を結ぶ三国街道に面しているだけでなく、魚野川から信濃川を下り日本海へと出て行くことができる、街道の陸運と舟の水運との中継地点であった。そこは、参勤交代の諸大名のみならず、商人や旅芸人、遊興の文人学者などが往来する、物と情報が行き交う場所でもあった。



図 13、14、高橋家所有の運搬船 高橋 捨松・写



図 15、船乗り(推定) 高橋 捨松・写

魚野川を利用した荷物の輸送は古くから行われていたが、江戸時代になると上田舟道として塩沢（上十日町）、六日町、浦佐、小出、堀之内、川口、長岡へと着く舟道が定着した。六日町から長岡への下り舟は朝 8 時頃に六日町を出て、夕 5 時頃には長岡に着いたが、上り舟は 4～5 日かかり、時に 7 日かかることもあった。

この川舟航路は江戸時代、六日町の遠藤家（丹後屋）が全権を掌握していたとされるが、明治に入り自由競争の時代となり、1880 年長岡商會が六日町舟を買い占め、定期航路を確立した。しかし、1902 年には高橋捨松、遠藤利作が長岡商會から舟を買い戻し、再び六日町の有志によって運航することになった（図 13・14）。舟の積荷は、下り舟には米や木呂（ころ）や杓（ぼい）などの薪や、木炭、ぜんまいなどの魚沼の物産と客であり、上り舟には干し魚などの海産物、塩、日常雑貨品などを積んだ。

明治から大正にかけて隆盛を極めた舟運送は、1923 年に上越線が宮内から塩沢まで開通し、さらに 1925 年には湯沢まで開通するとその荷と客は急激に減り、ついに消えることになる（南魚沼，1971，上 722-724 頁）。

ところで、水深が浅いにもかかわらず、流れが急で、雪解けなどで増水する魚野川は舟運送するには適しているとは言いにくい難所をいくつかかかえた川であった。舟に乗り組む人間は時に命がけであり、日頃から信仰を重んじ、縁起をかついだ。また、その仕事は荷揚げや、上り舟では川につかり舟を綱で引っ張るなど、重労働であった。そのためもあってか、食事は白米に魚や肉を炊き込むなどして食べた。大正初期まで魚沼地方の人びとは四足を食べることはなく、こうした舟者は地域のなかで明らかに特殊な生活者であった（磯部，1991，251-254 頁）。

また、その服装も通常は、半股引に紺のきゃはん、つまかけわらじ、冬は真蓑（まみの）を着用したというが、夏はほ

とんど裸に近かったうえ、冬も下は何も着けなかった。これは褌をして水につかれれば、上がった時、褌が凍ってしまうからだった。舟子たちは水に浸かった後、火を焚き、鞆丸をもみ、陰茎をこすりして暖め凍傷にかからないようにする必要があった(磯部, 1991, 239-240 頁)。(図 15)

舟運に関わる人びとは明らかに異形の人びとであった。今成無事平・新吾の写真を通覧すると裸姿の男性が多く現れるが、これらは衆道的な文化意識を反映したものというより、舟運に関わる人びとの文化や生活感覚を反映したものでしょう(図 16)。どちらにしても、今日では失われたこうした文化や独特な雰囲気、これらの写真に明らかに写されているだけでなく、地主名望家であった今成無事平・新吾が写し撮ろうとしていた点に六日町文化の層の厚みがある。

4. 開拓とユートピア

ところで、南魚沼の田地は魚野川やその支流に形成された扇状地などにあり、その多くは 17 世紀以降、新田開墾が行われ、米作が本格化したところでもあった(六本木, 2002)。この地域は、江戸時代、1679~1681 年の越後騒動により高田藩から天領となり、1720 年代には幕府領会津藩預り地となっており、幕府と会津藩との中間的な支配にあり、地主名望家層の自主独立性が発揮されやすい条件をもっていた。荒地や氾濫原を開拓し、新たな社会を創造しようとする気風をもった地主名望家層の意欲に支えられて、地域の文化も展開した。



図 16、今成無事平・写

明治初期の今成家、大正期の高橋家、昭和初期の平賀家の映像を通覧すると、共通した独特な意識、含みを感じられる。それは、地域のコミュニティとその文化を担っているという気概だけでなく、自らの浄土をこの世に現出させようとするユートピアイズムがある。

しかし、いままでみてきた今成家や高橋家と違って、平賀家は、大地主でなかったこともあり、地主制が生み出す社会的な矛盾に鋭敏にならざるを得ない位置にあった。平賀洗一は長岡中学校から仙台の第二高等中学校に進学したが、二高時代から社会主義研究会に所属し、1923~26 年に新潟県北蒲原郡木崎村(現豊栄市)でおきた小作争議の応援にも参加している。さらに、東北帝大医学部に在学中に、無産者新聞配布したことで逮捕されている。しかし、その後は、敗戦後の 1946 年 3 月 15 日に六日町の共産党細胞をいち早く結成し、活躍するまで目立った活動はない(桑原, 2002, 34~38 頁)。



図 17、『へぐらじま』より

平賀フィルムは、この活動の空白の時期、1935~1938 年にかけて集中的に製作されている。内容的には地域の行事・イベントや、家族を撮ったものが多くを占めるが、もう一方で、女性美を追究した『流れ』(1936)、『海女 へぐらじま』(1937)、『光の魚』(1938) の 3 部作がつくられる(図 17)。1931 年に日本政府は満州事変を起こし中国へ侵出し、1937 年 7 月 7 日には蘆溝橋事件によって、中国との本格的な戦争を開始する時期に、こうした作品を製作しようとするその姿勢には、あきらかに反時代的なものがある。また、『流れ』では五十沢の山奥の溪流をヨーロッパのある水辺に見立て、沐浴をする女性を撮るといった美的なモチーフ(図



図 18、『流れ』より

18)には、美を装った反権力的な意志が揺曳している。またそれが、作品に一定の美的緊張感も生み出してもいる。

一方、今成家は戦中、占領期にかけて農場開拓を試みているだけでなく、当主今成拓三は南魚沼郡の大政翼賛運動の中心人物として活躍するだけでなく、敗戦後、ビルマ独立の国家代表主席であったパー・モウの日本亡命の引受先となっている。

六日町は陸の孤島と見えながら、明らかに外と内とが交差する国家の辺境として位置し、新たな政治的ビジョンを胚胎しようとする複雑なジグザグ運動を起していたのだ。

おわりに

六日町の4人の映像制作者の世界をたどっていく時、今まで我々が知っていた写真史や映画史の姿は一変する。

そこには、黒々とした暗みと乱反射する光を浴びる山や川があり、思ってもみないような、想像したことがないような人びとの生活や姿が浮んでくる。これらの写真と映画は、かつて鈴木牧之が『北越雪譜』で描いたような雪国の生活とその心の世界を、その地域に住まうものだけが語りえる相貌をもって表出する。

新潟の地に散在するだろう、こうした消し去ることのできない痕跡は、先人たちの生きた証であり、我々にとっての歴史的、文化的な遺産でもある。それは過去と未来をつなげ、ローカルからグローバルへとつながる環を浮かび上がらせてくれるものだ。

人びとは雪の中で、何を思い、何を成し遂げたのか、目を凝らし、立ち止まって、耳を澄ませば、声が伝わってくる。我々は、時に、立ち止まらなければならない。そして、またそうした過去の声に響き合うようにして、生きる必要がある。

アーカイブとは、新たな未来を創ろうとする時、必要な過去を見つけ出すツールだ。我々は次の一步を踏み出すために、先人たちの生き方、知恵に学ばなければならない。

【引用参考文献】

- 磯部定治『魚沼の明治維新』恒文社、1991年
桑原春雄『南魚沼先駆けの群像 1 日本共産党の人々』桑原春雄、2002年
鈴木牧之「雪蟹」『校註 北越雪譜』野島出版、[1841] 1970年
中山清『巨大地主経営の史的構造』岩田書院、2001年
新潟県『新潟県史 通史編7 近代二』新潟県、1988年
農政調査会『新潟県地主資料第拾集 新潟県大地主名簿』農政調査会、1968年
南魚沼郡誌編集委員会『南魚沼郡誌 続編 上巻』新潟県南魚沼郡町村会、1971年
南魚沼郡誌編集委員会『南魚沼郡誌 続編 下巻』新潟県南魚沼郡町村会、1971年
六本木健志『江戸時代百姓生業の研究——越後魚沼の村の経済生活』刀水書房、2002年



はじめに

デジタル・アーカイブと一言で云っても様々な形態がある。博物館、美術館、公文書館、自治体施設そして大学などが、時に潤沢な予算を背景として、その所蔵品のデジタルデータを作成し、データベースを構築し、デジタル・アーカイブとしてインターネットもしくはイントラネットにより公開する場合もあるだろう。またデジタル化とシステム構築の予算とノウハウの不足により、また著作権の問題から、資料の分類に留まっているものもあるだろう。

今回、新潟大学で立ち上がった「にいがた地域映像アーカイブ・プロジェクト」は、にいがた地域全体の文化映像遺産の活用を目指し、ひとつの完結したアーカイブを立ち上げるのではなく、むしろ既に存在する、また生まれつつある複数のデジタル・アーカイブ(ズ)をネットワーク化し、共通の検索用インターフェイスを提供する「地域映像クリアリング・ハウス」の立ち上げを目指す。そのためには、戦略的に先ず新潟大学自身が、それが所蔵している映像文化遺産のデジタル・アーカイブ化を進め、そのノウハウとモデルを構築する。同時に、にいがた地域で取組まれている映像資料の収集現場（個人の蔵も含む）を歩き、調査し、時に必要ならばノウハウを提供し、大学が現場調査を踏まえてモデルを提案する。

では、大学はどのようなノウハウとモデルを提案すべきなのか。ここに簡単にデジタル・アーカイブの原理を説明し、その方向性を明らかにしたい。デジタル・アーカイブの基本は、映像資料のデジタル化にある。それは、(1) 映像資料（写真やフィルムだけではなく、関連する紙資料なども含む）のデジタル化、(2) 映像資料の属性情報および資料情報のデジタル化、(3) デジタル化された属性情報および資料情報のデータベース化、そして最後に(4) デジタル・アーカイブのシステム化である。データベース化を行うことで、多くのデジタル画像データを必要に応じて検索・抽出することが可能になる。またアーカイブ構築の目的や著作権の設定によって、インターネットなどに接続し誰でもデータをアップロードし参加できる開放型のシステムにするのか、もしくはその施設内だけの閲覧にとどめる厳格に管理された閉鎖型システムにするのかが決まる。

1. 映像資料のデジタル化

潤沢な予算がある施設ならば、所蔵の映像資料を、WEB閲覧用JPG形式（大、中、小）に加え、商業利用の為の高解像度でのデジタル化（TIFF形式）をも整備することも可能であろう。しかし、ほとんどの施設は、むしろ低予算でのデジタル化に満足をしなければならない状況にある。また映像資料とそのデジタルデータに対する著作権および所有権の未整理から、単に、デジタルカメラで映像資料を撮影・現像し、とりえず資料として閲覧のみをさせている施設もある。

大学側としては、このような現状を踏まえ、まず地域デジタル・アーカイブ構築の明確な目的を設定し、その構築に必要な最低限の規格（縦横の解像度および画像自体の解像度など）の提案を行うべきである。フィルムなどの洗浄とデジタル化を外注した場合のコスト調査、外注の予算がない場合に自前で行う安全なスキャニングの方法、映像資料のデジタル化によって生まれるデジタルデータに対する著作権のライセンスの設定方法などをマニュアル化するだけではなく、個別の相談にも乗る必要があるだろう。しかし公開を望まない場合、デジタル化を行わない場合でも、最低限、資料の「属性情報および資料情報」（メタ・データ）の整備を提案すべきである。

2. 映像資料の属性情報および資料情報のデジタル化

映像資料のデジタルデータには、撮影日、撮影機種、解像度などの「属性情報」が自動的に埋め込まれる（EXIF規格など）。しかしこうした属性情報は、撮影対象や撮影された歴史的文脈、撮影者などの資料的情報を含まない。また一般公開の際に、必ずしも必要な情報でもない。故に映像のデジタルデータを資料として整備するには、この属性情報に加え、「資料情報」（カタログデータ）を整備する必要がある。しかし撮影者、撮影対象、撮影地域、歴史的文脈、元資料の所蔵場所などを、後々検索しやすい規格・形式（スキーマ）で整備しなければならない。共通の検索用インターフェイスによる「カタログサーバー」を構築し、複数のアーカイブズをネットワーク化するならば、地域全体が共通のカタログ形式で整備を進めなければ無駄になる。

しかし資料の分類は簡単ではない。単なる単語検索ではなく、資料全体の意味を検索できるように情報のオントロジー（語彙の分類体系と推論ルール）に配慮したデータベース構築や、連想検索などに見られるセマンティッ

クウェブなど次世代技術の導入も含め分野横断的なノウハウの蓄積を必要としており、それが故に大学などのイニシアティブによる「新潟モデル」構築の可能性もある。

3. メタ・データのデータベース化

共通の規格・形式（スキーマ）で「属性情報および資料情報」（メタ・データ）を整備することにより、映像資料のデジタルデータに関する情報を一元化し共有すること、すなわち「クリアリング・ハウス」の構築が可能になる。また逆に、この資料情報のデジタル化を映像資料のデジタル化に先行して進めることで、少なくともまだデジタル化されていない元資料や、またウェブでの公開を望まない資料の所在が検索により明らかになる。「どこに、なにがあるか」が一元的に把握できるようになることは、「地域」全体を対象とした映像アーカイブの構築には必須であろう。

また検索方法に関しても、新潟大学が推進しソフトウェアをサイトライセンスにより導入している地理情報システム（GIS）と連動させることも可能だ。撮影場所や所在地の位置データ（緯度・経度）を、メタ・データに加えることにより空間検索が可能になる。日本語は読めるが、インターネットを通じて必ずしも日本語を入力できない海外の研究者や視聴者に対して魅力的な検索方法となるだろう。また関係がないと思われていた映像資料が、空間検索によって意外な関連性を明らかにすることもあ

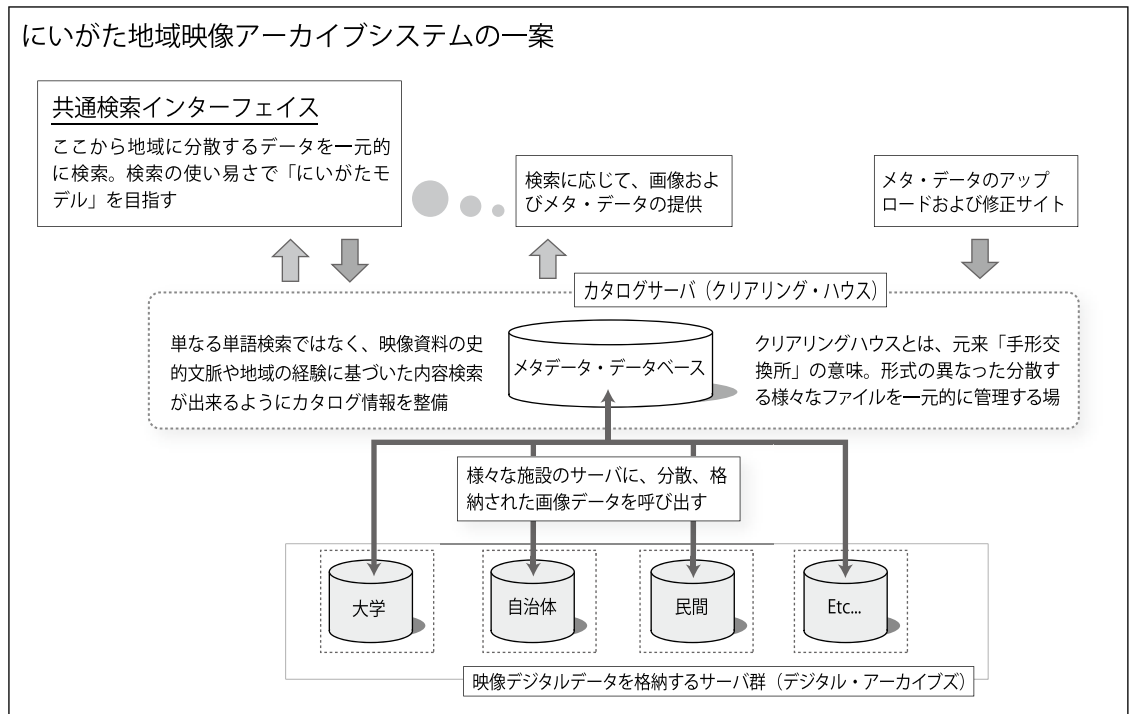
4. デジタル・アーカイブのシステム化

「クリアリング・ハウス」を構築し、一般に公開するためには、インターネットに接続されたデータベースサーバシステムを採用しなければならない。これにより誰でも、どこでも、にいがた地域の映像資料の所在を知ることができる。図書館のウェブ検索と同じことである。

これにより、「属性情報および資料情報」（メタ・データ）の検索インターフェイス（ウェブ検索ページ）を核として、各施設が管理する様々なデータ格納サーバがリンクで結ばれることになる（図参照）。もちろん公開を望まない場合、リンクを張る代わりにその映像資料に関する視聴条件もしくはライセンス規定を見せればよい。またデータベースサーバは、メタ・データのアップロードなど、ある程度の条件のもと各自参加者が行えるように自動化し、WIKIPEDIA（ウィキペディア）のように共同管理することも可能だ。現実的には、大学が提供するサーバ上でこそ、この様なシステムの運営と管理は可能であろう。

ハードルは高いが、しかし課題はIT技術にのみ在るのではない。むしろ、問題は大学が地域と信頼関係を作り、このようなネットワークを運営できるかどうか、そして更に、このようなアーカイブの構築により如何なる新しい「学び」が可能になるかを地域に対して提案できるかどうか、これが真の課題であろう。

にいがた地域映像アーカイブシステムの一案



新潟大学人文社会・教育科学系研究プロジェクト

「地域文化に関するコミユナルな映像アーカイブ情報の構築と情報発信」プロジェクトスタッフ紹介

原田 健一（はらだ・けんいち）

新潟大学人文社会・教育科学系 教授

1956年東京生まれ。東洋大学大学院社会学研究科博士課程修了。博士（社会学）。専門は映像社会学、メディア文化史。映像・音楽の製作をするも、40代に南方熊楠旧邸の調査に従事することになり、研究の世界に入る。このプロジェクトでは映像の発掘や調査、データベースの作成などをおこなう。著書としては、『占領期雑誌資料大系・大衆文化編全五巻』（岩波書 2008～2009年、共編）、『映像社会学の展開』（学文社 2007年）、『南方熊楠 進化論・政治・性』（平凡社 2003年）など。



古賀 豊（こが・ゆたか）

新潟大学人文社会・教育学系、准教授

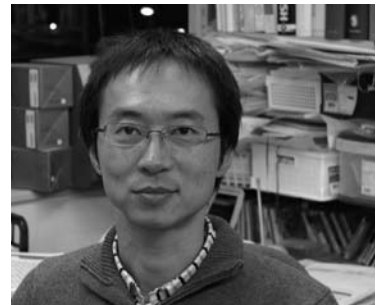
一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位修得後、財団法人郵政国際協会電気通信政策総合研究所の研究員を経て、現職。主に、近代以降のメディア・テクノロジーと主体の形成・変容過程に関心を持つ。「山古志民俗資料館収蔵品救出プロジェクト」、「刈羽村民俗資料収納庫への民具返還プロジェクト」などの映像制作にも携わる。著作としては、『シリーズ社会情報学への接近2 電子メディア文化の深層』（早稲田大学出版、2003年、共著）など。



中村 隆志（なかむら・たかし）

新潟大学人文社会・教育学系、准教授

専門は情報システム論・情報メディア論近年では、携帯電話（ケータイ）がもたらしたライフスタイルの変化について、特にケータイを用いた非言語的な（動作による）相互コミュニケーションについて研究中。本プロジェクトではアーカイブの運用などを担当。著作としては、「多重文脈性をまとうツールとしてのケータイ」（『情報文化学会誌』[vol. 15, no.1, 2008]）など。



北村 順生（きたむら・よりお）

新潟大学人文社会・教育学系、准教授

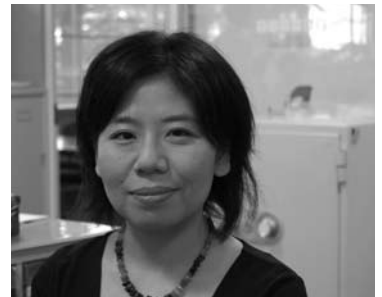
1967年東京都生まれ。1994年東京大学大学院社会学研究科修士課程修了。財団法人郵政国際協会電気通信政策総合研究所（現・マルチメディア振興センター国際通信経済研究所）副主任研究員を経て、2001年より新潟大学人文学部助教授（現・准教授）。専攻は、メディア論、メディア・リテラシー研究。本プロジェクトでは、地域文化の現状を地域に根ざした視点で記録、保存、発信していくための仕組みやネットワーク作りを担当している。著書としては『シリーズ社会情報学への接近2 電子メディア文化の深層』（早稲田大学出版会 2003年、共著）、『大学における共通のありか』（東北大学出版会 2005年、共著）、『形と空間の中の私』（東北大学出版会 2008年、共著）など。



石田 美紀（いしだ・みのり）

新潟大学人文社会・教育学系、准教授

1972年生まれ。専門は映像文化論。ローカルかつプライベートな映像の制作・受容の系譜を整理し、アマチュア映画映像とは何かを考察する。商業映画は、産業構造から様式にいたるすべての局面において、グローバルスタンダードを目指して発展してきた。商業映画を中心に記述される大文字の映画史にアマチュア映画映像はどのように位置づけられるのか、という問題に関心をもっている。映画関係の著作としては『入門・現代ハリウッド映画講義』（人文書院 2008年、共著）、『形と空間のなかの私』（東北大学出版会 2008年、共著）。



平成 21 年 2 月 7 日 にいがた地域映像文化遺産 展覧・上映イベント

「地域映像の力—新潟からの情報発信とアーカイブ構築をめざして」講演者紹介

金子 隆一 (かねこ・りゅういち)

東京都写真美術館、事業企画課専門調査員

1948 年東京、日蓮宗の寺に生まれる。立正大学文学部卒。写真史家。僧侶。東京都写真美術館専門調査員。主に大正・昭和期の写真研究。共著に『日本近代写真の成立』（青弓社 1987 年）、編著に『インディペンデント・フォトグラファーズ・イン・ジャパン 1976～83』（東京書籍 1989 年）など。また、各美術館での展覧会キュレーションなど多数。

石井 仁志 (いしい・ひとし)

写真研究家

1955 年、宮城県仙台市生まれ。アテネ・フランセ高等科修業。占領期雑誌研究、近現代文化史研究および評論（写真、映像、音楽）、中島健蔵研究をライフワークとしている。写真分野では、木村伊兵衛研究、細江英公研究を中心に現代若手写真家の作品研究および展覧会、個展のプロデューサー、キュレーターなどを務める。清里フォトアートミュージアムのヤングポートフォリオを毎年支援している。幅の広い芸術分野の融合、文化サロンの構築を目指し、言論活動を展開している。現在、岩波書店から刊行中の『占領期雑誌資料大系・大衆文化編全 5 巻』の編集を担当している。

平賀 壮太 (ひらが・そうた)

前熊本大学教授

1936 年新潟県六日町で平賀洗一の次男として生まれる。1965 年大阪大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。京都大学ウイルス研究所助手、スタンフォード大学客員研究員を経て 1985 年熊本大学医学研究科教授。分子生物学者。2000 年日本遺伝学会賞を受賞。2002 年熊本大学教授を定年退官後、京都大学理学・医学研究科客員研究員。著書には『生物の惑星』（太陽書房 2003 年）、『蝶・サナギの謎』（トンボ出版 2007 年）、『カステラのかげら』（牧歌舎 2008 年）など。

吉原 悠博 (よしはら・ゆきひろ)

写真家・美術家・新潟田市「吉原写真館」六代目

東京藝術大学油絵科卒業。新潟県新潟市にて吉原写真館館主六代目。美術家として、写真、映像インスタレーションによる作品を多く発表し、近年、パブリックアートとしてホテル、公共施設での作品設置、アートディレクションも行っている。新潟大学教育人間科学部 非常任講師も務める。

岡田 一男 (おかだ・かずお)

下中 E C アーカイブズ所長・東京シネマ新社代表取締役社長

1942 年、岡田桑三の長男として東京に生れる。1961 年全ソ国立映画大学 (VGIK/ 現全露国立映画大学) に入学。1966 年全必修科目修了し帰国し、1971 年社会精神医学を扱った『人間の心と社会』を卒業製作として、ソ連国家試験委員会より芸術修士号と劇映画・TV 監督資格を取得。1983 年東京シネマ新社代表取締役社長。作品には『マリンフラワーズ』（1975 年芸術祭優秀賞）、『ムーンジェリー』（1977 年 ISFA ヴェネチア大会名誉賞）、『石垣島川平のマングナシ』（1981 年）、『種子の中野海』（2000 年ロンダ科学映像祭最優秀学術映像賞）など。

とちぎ あきら

東京国立近代美術館、フィルムセンター主任研究員・映画室長

1958 年、東京生まれ。ニューヨーク大学大学院卒業。映像専門誌『イメージフォーラム』編集長、フリーで映画に関する原稿執筆、翻訳、通訳、映画祭等の企画運営などに携わったのち、2003 年より現職。映画フィルムの収集・保存・復元、貸出などアクセス対応に従事する。主な著書、翻訳書に『アモス・ギタイーイスラエル／映像／ディアスポラ』（フィルムアート社 2003、共著・共編）、『ロバート・ロドリゲスのハリウッド頂上作戦』（新宿書房 1999 年、翻訳）など。

主催：新潟大学人文学部、新潟大学人文社会・教育科学系
研究プロジェクト「地域文化に関するコミユナルな
映像アーカイブ情報の構築と情報発信」

共催：新潟大学附属図書館、新潟大学社会連携研究センター、
新潟大学国際学術サポートオフィス

後援：新潟県、新潟市、南魚沼市、新潟日报社、新・にいがた市紀行、にいがた国際映画祭

にいがた

地域映像アーカイブ

第一号 2009 年 2 月 7 日発行

ISSN 1883-5643

編集・発行 新潟大学人文学部

新潟大学国際学術サポートオフィス

問 合 せ 先 〒 950-2181 新潟市西区五十嵐 2 の町 8050

新潟大学 国際学術サポートオフィス

電話：025-262-7631 FAX：025-262-7519

Email：globalstrategy@isc.niigata-u.ac.jp

印 刷 (株) 昭栄印刷

